### 幡多には何故か皇族が二度配流されている



鳥羽(東久) 年(承久) 年(承久) 上皇がは 2 1 3年) 3年) に 幕 所 所 後

承 に皇掲了し真な族げ承時吉 1 (じょう (じょう なのでは、 ないでは、  $\mathcal{O}$ 乱 きの ゆ乱

対域権である 対域である。 等でがもを を対明を がももに である。 がもたいのの がもたいののので がある。 がある。 ののののので がある。 のののので にである。 がはである。 のののので にである。 のので にである。 はである。 はでる。 はである。 はでる。 はでる。 はである。 はである。 はである。 はである。 はである。 はでる。 はで。 はでる。 はでる。 はでる。 はでる。 はで。 はでる。 はでる。 はでる。 た史諸し政時府立羽貴時との関た権代が抗上族に



鎌倉幕府に反旗の度に幡多に

発行人

会長 土森正-

責文 寺尾敏夫

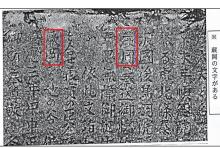


土御門

THE RES

所の井戸

多者対たのである。 を選上をでは、 を選上をでする。 を選上をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会議をでする。 を会がでする。 を会議をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 を会話をでする。 をのいるをでする。 をのいるとのである。 をのいるとのである。 をのいるとのである。 をのいるとのである。 をのいるとのである。 をのいるとのである。 をのいるとのである。





辺鄙な寒村に上陸

本来目指すべき上陸地点

3迎えした有井川

四万十市

兀 乱

●元弘元年 (1331年6月5日) ●元弘元年 (1331年6月5日) (1333年7月17日) (1333年7月17日) 経幕宗家の勢力の間で 条高時を当主とする北 条高時を当主とする北 条高時を当主とする北 を加れた全国的内乱。 最の● 末ら元 3 期ん弘の 元は、(活年元 鎌げ **完弘** 3年4月2 鎌倉時代 が 倉に  $\mathcal{O}$ で北北皇打 日

たこる赴醐はに も前い天尊発 しるにたとれて が、 に庄をり佐受た判ら尊たこへ出、へけ。官え良。のに立翌の、同の50親し 

た川親録2神 経王に8職 こ命じ な下序 り田と従船た に上陸にんのが7日に上陸のが7日に上です。 まに す。

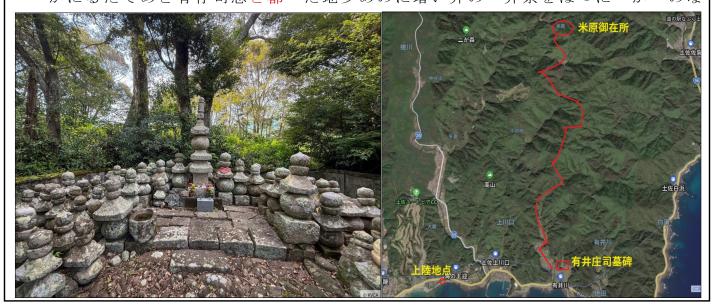
### 暗 殺 定

そかしな弾には● れらてく正迎最有 を攻い米のえ初井 何める原館らは川 とらのににれ有でかれて御移、井の 

し井良記月

予 カン ?

**ホテル海域科理海**坊 尊良親王一行の上陸地 常識なら上川口の領主がお迎えすべきだが、 何故か有井川の寒村の領主がお迎えしている不思議



歴史が始まる。

皇の皇子尊良親王が土佐に配流されたことにより下田の

今を去る六百七十八年前、元弘二年三月、

後醍醐天

次は宮畑家の御系譜の拝観を許され書き写したもので

北條相模守高時依叛逆一宮尊良親王を土佐国へ奉配幡多

- 98 -

にて長崎刑部左衛門を以て神職となす

元徳二年(一三三二)七月二十七日一宮尊良王ノ

齋祀

貴船神社由緒

利社殿に被命永護為當所へ残し被置

也右貴布袮の御神

廿七日木船谷に一字を造営し之に崇め鎮め奉る 之後當処へ御遷座奉りて當所の代祖神と仰ぎ同二年七月 の御守神として鞍馬山鎮座貴布祢の御神を御勧請御着岸 郡入野郷有井川へ奉移御船者當湊へ入津有之然に右館船 古社調云勧請由縁記云人王九十五代後醍醐天皇元徳元年

其の後新王には御帰洛被為遊 貴布祢の神明は當所万

遷座遊ばさ

元禄七年

(一六九四)

九月八日木船谷より

子孫繁盛仕其餘人家も次第に繁昌仕右栗原町も此地へ引 地に栗原町と云商漁の居住す町ありて御齋鎮後は正利の 當処へ御遷座之頃迄は此の地には人も家も無之間崎村の 々世の御守神に崇尊鎮奉 に付御家臣長崎刑部左衛門正

### $\mathbb{H}$ 0 歴 史 には 尊良 親 王. カゝ 5 女台 ま

貴船神社の神官の宮畑 に大祖神として貴船神 に大祖神として貴船神 に大祖神として貴船神 ●尊良親王は有井川を○尊良親王は有井川をとして京都鞍馬の貴船た際に御座船の守り神たされ 左衛門を貴船神社のか 七月二十七日長崎刑部 尊良親王が1332年 家に伝わって いる。 畑の

に渡って責任を果たし 神職を辞したが六百年 誉市民になっている。 ではないか。宮畑虎夫 ではないか。宮畑虎夫 け思検の 史 ン昭 ●尊良親王については、 即ち四万十市と黒潮町史跡が下田と有井川、 ノピック 3. 水 崩壊と 畑家宮

ていたという認識が各幕がこの地で展開されの政権争いの事件の一天皇親政を望む朝廷と 欲し から始まる」と記述して ●左記の「 四万十市史の記述に行政でなされていない。 「下田の歴史尊良親王 いも

佐之浦々」によると、 の「描かれた土ものである。

転売する船主が出現し仕入れて中村の商人に運び、帰り便で物資を 戦後物流の流れが大きお陰ではないだろうか。 尊良親王と貴船神社の た。 搬業で大繁盛の港となっ て下田には造船業と く変ってしまった。 後物流の流れが大き 遡ればこれも偏に 運

### 樋 真吉 の写真をめぐる話

題

開業し、

後に

●樋口先生」に載った もう1枚は桑原戒平の 枚が知られているが、 めぐる話題」という 真があ 樋口真 吉 説明次頁 0) 写真 たの 見渋を

### 下 出 蓮 杖 $\mathcal{O}$ 写真

<見る1枚で下岡葉 ●左記の写真は最\* もよ 蓮 杖

綿船子職

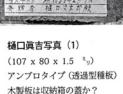
責を全うし

だとされてる。脇に連横浜で米国人写真師運横浜で米国人写真師運がいるので米国人写真師運動がある。 する際に撮影したものて土佐に横浜から帰還 真吉が会津戦争 浜に店を構えた 時

真吉の写真の2

枚目 は

一時期に横浜で写真官を一崎の上野彦馬とほぼ同して、「女久二年、長





入門 第一部」(新潮社)

堀与兵衛 (保利与兵衛、大坂屋与兵衛) (東京日日新聞・サン写真新聞社) 「日本の世相百年史」

写真を渡世とする決心をし、翌慶応元年には祇園切通しに写場を建て、 び、京都丸太町高倉東入ル堺町御門前にガラス渡世の看板を掲げた。 慎太郎、田中光顕、長岡謙吉、美正貫一郎、小笠原唯八、岡本健三郎、 洋伝方写真処 祇園町出店写真場 保利與兵衛」の看板を掲げた。 辻礼輔と組んで写真術を研究した。 元治元年(1864)七月の禁門の変以後、 の時寺町仏光寺下ル西側に出店した。当時京都に在住していた舎密学者・ 堀与兵衛は文政九年(1826)、京都に生まれた。大坂でガラス製造を学 保利与兵衛が祇園支店で写した写真は土佐関係者が多く、谷干城、 佐々田岡 西

が、慶応3年頃から石畳に変わる。 三のとき、 継ぎ、その後三代目・堀真澄(与一郎)に受け継がれた。 四代目堀真澄 けて写す例と、縁台の前に立って写す例がある。縁台の前は、 が下からのぞいている例がある。祇園支店の写場は、人が座れる程度の高 知られている。他に、谷干城の写真に見られるように、花びら模様の敷物 チェス盤のような模様(元禄市松模様)のある敷物が、従来の研究でよく 堀与兵衛は明治十三年に没し、 長男の堀真澄(二代目堀与兵衛)が跡を 緑台の前は、土間だった人物は縁台に座るか腰掛 傾

木三四郎を写した各写真が残されている。祇園支店の写場の特徴として、

太平洋戦争のため堀写真館の歴史が終わる。



京都の堀与兵衛祇園店での1枚で、左記の遺帯で、左記の背景下部の模とが堀り兵衛の模様と と模な記店

盛期だと書かれている。 は下岡蓮杖写真館の最 写真を写した慶応四年 に浅草に移っ

-

2007年

## 中浜万次郎の写真術

## 福沢論吉らと再び渡米。帰国後に 具を使い、撮影したとみられる。

### 渡米、52年帰国し、60年咸臨丸で 中に遭難し、米捕鯨船に助けられ 中に遭難し、米捕鯨船に助けられ 中、1841年、出漁

蕊下

江川家江戸屋敷につとめていた。 力などを見込まれて家臣となり、 力などを見込まれて家臣となり、 当時、西洋砲術、海防問題の第一人

### 撮 真=が、中浜(ジョン)万次郎 されていた幕末の武士の写真=写 静岡県伊豆の国市の旧家に保存 影者はジ ョン 万次郎

真と旧家の文書を調べた結果、万た。東京大学史料編集所などが写 次郎が遺米使節の通訳として渡米 T)年7月、米国から持ち帰った道 し、帰国した直後の1860(万延 (1827~98)の撮影と分かっ

事」との記述から同時期と判明。 年七月十六日夕七ツ時写真シ奉ル 写真の撮影は包み紙の「万延元

写真は江戸幕府の代官で、

静岡

た。人物の特定はできていないが、 衛門ではないかとみられている。 湿板写真で綴8・4た、横7・1 らみつかった。ガラス板を使った 川家の史料を集めた「江川文庫」か 駿河、武蔵、相模などを支配した江 県・韮山(現伊豆の国市)を拠点に

る」と今回の成果を話している。 し、広めた人物ということができ して写真を残す写真文化を移入 物であるとともに、個人的記録と て本格的写真技術を持ち込んだ人

さらに、 述が残っていたことが分かった。 使い、8日間写真を撮ったとの記 どを記録していた「御出府日記 月、万次郎が写真鏡(写真機)を 江川家江戸屋敷の来客な

授は「万次郎は日本人として初め 査に携わった保谷徹・同編纂所教 幕末維新史が専門で、今回の調

### 静岡の旧家保存米国みやげの 力 メラで?

## 安政七年正月~万延元年五月

【万次郎、遣米使節団に同行】 安政七年正月十九日、万次郎は咸臨丸に乗船して浦賀を出港。

サンフランシスコに到着後、咸臨丸がメーア・アイランドのドックに入っ ている間、万次郎は米国の写真師について撮影技術と薬品の使用法を 写真機と大量の薬品を購入した。(中浜東一郎「中濱萬次郎傳」)

万次郎ハ衣類「縫物スル道具「シヨエーミシン」、鳴物「アツコレ

デアン」、写真鏡ノ道具三品ヲ持帰リ各其術ヲ伝授セリ

時代は大きく動き出そうとしていた。

が、年号は安政から万延に改元され、この間、桜田門外の変があり、

万延元年五月、万次郎はアメリカから帰国。

出発と帰国は同年だ

# 小沢太左衛門の写真からわかったこと

小沢神様写真御尊像御一面、恵霜斎所持、江川太郎左衛門源英□小沢写真の包み紙:「万延元年七月十六日、夕七ツ時写真シ奉ル事、 敬奉所持、敬慎」

万延元年七月十七日 「御出府日記」(江川家の江戸邸の動きを記した日記)

講武所御同役下曽根金三郎外六人写真鏡為御頼、今日中浜万次郎 万延元年七月十八日 へ御出ニ付、御湯漬御前部七人前山田熊蔵方へ為持遺候事

内藤御隠居清閑様御儀調練場御出席、 夫より中浜万次郎方ニ而写

万延元年七月二十九日

写真鏡御頼之由(略) 講武所頭取松平仲様、同教示方松平大内蔵様・川勝光之助様・小 野金藏様・桂川主税様以下、 飯田律郎とも、 中浜万次郎方江被参、

フランシス=ホールの記録(万延元年九月十六日)

with considerable success return from America. He has been taking daguerreotypes at Yedo Manjiro, the interpreter, has been confined to his home since his

夕方馬にて他出両国写身屋へ参る処夕方ハ不写と申事空敷帰る 文久二年九月二日

今日中浜万次郎被召、 文久二年十一月二日 御前に而写真被仰付候、 左膳も弐枚写ス

### 万次 郎 $\mathcal{O}$ 写真

代・鈴藤勇次郎「航亜日記」)

写真師に就いて撮影のい思いで米国滞在中には咸臨丸で渡米した時、安政七年1860万次郎 物が残した日記などに上に彼の広い人脈の人 撮影用材 入して帰国した。 実習を受け、 次郎も写真を沢山 写真店ではないが、 ているようである。 中浜万次郎 科を大量に 写真機と 購 Ĺ 万 ★高島秋帆(長崎砲術室在時の撮影になる。

(長崎砲術家)

の執政に就く前江戸滞 万次郎の写真絡みで彼随所に残されていた。 の人脈も見えてくる。 もらったという記事 万次郎に写 ★吉田東洋 (土佐藩家老) 真を撮

名前の名残りである。 高島平はその演習地の 術演習を行った。東京 の近代化を訴える意見 ヘン戦争後幕府に火砲 長 (崎出身の砲術家でア

万次郎の上司であった。れ品川台場を構築した。詳しいので幕府に呼ば 左衛門は万次郎の仲人で撮影だと判る。太郎江川太郎左衛門の屋敷 を造った人物。 伊豆韮山代官で でもある。 左衛門は万 太郎左衛門 海防に反射に

であり、幕府にフラン洋学者・医者・兵学者 ★寺村左膳道成 ス式兵制を導入させた。 ★大鳥圭介

【中濱東一郎著「中濱萬次郎傳」】

次いで薬品及び其調合法、使用法等をも研究したる後、機械は勿論、

多量の薬品をも購入して帰国したり。其主要なる目的は郷里に在 萬次郎は又此度の滞在中米国の写真師に就きて撮影の実習を為し、

るが、 動きにしばし ●樋口真吉の3枚目の 土佐藩家老・土佐藩 彼の日記に「文にしばしば登場す 月二日今日

(江川家手 | 二而写真被仰付候、| 中浜万次郎被召、御, 人二年十一月二日今 数年の撮影とあるも 処で撮影したか不 めるも何 維新前 樋



【デーモン牧師談】 (1860年6月1日付、フレンド誌)

発明のあることを世人に知らしめんとの意図もありしに相違なし。

には未だ写真術の知られざる頃なれば、帰朝後外国には此の如き

に其姿を撮影し置かんが為なりしも、又当時本邦

これは彼の母の姿を写そうという目的で買い入れたもので、

であります。 有志で墓参に行きます。 は真吉の生誕 大会が四万十市武道 ●尊良親王の記事 に来てくださ П ります。是非応援か四万十市武道館口真吉杯幡多剣道 月 十 月三日は第21 兀 の日です。 V 日 金 を



Ш

### 万次郎の作品 (写真撮影のわけ)



左.. 右下: という。 とい。 という。 とい。 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。



右上:大鳥圭介、江戸開成所に召